

視点と日本語受動文の使用

——英語と対照させて——

大塚容子

Empathy and the use of passive sentences in Japanese

—— compared with English ——

Yoko Otsuka

Abstract

Kuno (1978) has proposed some general principles concerning “empathy.” They are Surface Structure Empathy Hierarchy, Speech Act Empathy Hierarchy, Topic Empathy Hierarchy and others.

The empathy relationships of passive sentences are different from those of active sentences in terms of Surface Structure Empathy Hierarchy. We have compared the use of passive sentences in Japanese with that in English, using *The Widening Gyre* written by Robert B. Parker and its translated version.

To summarize, passive sentences in Japanese are used in order that the conflict between the empathy hierarchies is avoided, and those in English are used when the agent can not be mentioned. It seems that the difference of the use of passive sentences between English and Japanese comes from the fact that English is sentence-oriented language and Japanese is discourse-oriented language.

Received Sept. 26, 1994

Key words : empathy, empathy hierarchy, passive sentence, active sentence, sentence-oriented vs. discourse-oriented

1. はじめに

太郎から花子に本の所有権が移動したという事態を表現する場合、いくつかの表現が可能

である。「太郎が花子に本をあげた」、「太郎が花子に本をくれた」、「花子が太郎に本をもらった」等と言えるだろう。これら3文の違いは「視点」という概念を導入するとうまく説明することができる。「太郎が花子に本をあげた」は中立的な立場か、あるいは太郎の視点からの表現であり、「太郎が花子に本をくれた」、「花子が太郎に本をもらった」は花子の視点からの表現である。久野(1978)はこのような日本語の授受表現だけではなく、広く言語一般に見られる現象までも射程に入れた、「視点」の理論を展開した。

大塚(1989)は、川端康成の『雪国』とその英語訳を比較することによって、久野が定式化した3種類の視点ハイアラキーが日本語と英語でどのように適用されているかを調査した。その結果、3種類の視点ハイアラキーは日本語にも英語にも適用される一般的な規則であることがわかったが、日・英語間で受動文の使用に違いが見られた。能動文と受動文は視点ハイアラキー上、異なる視点関係を示す文である。そこで本稿では英語で書かれた小説とその日本語訳を調査して、日本語の受動文について視点の観点から考察する。まず、久野の視点論、調査対象となる受動文について概説する。次に調査方法、結果について述べ、最後に日本語の受動文と視点との関係について考察する。

2. 視 点

久野(1978)は「共感度」という概念を(1)のように定義し、日本語の授受表現の視点ハイアラキーを(2)のように示している。

(1) 共感度

文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感 (Empathy) と呼び、その度合、即ち共感度を $E(x)$ で表わす。共感度は、値0 (客観描写) から値1 (完全な同一視化) 迄の連続体である。 (久野(1978), p. 134)

(2) クレル E (与格目的語) $> E$ (主語) (同, p. 141)

ヤル E (主語) $\geq E$ (与格目的語) (同, p. 142)

モラウ E (主語) $> E$ (非主語) (同, p. 160)

そして個々の動詞の視点関係だけではなく、視点に関する3種類のハイアラキーを(3)~(5)のように定式化している。

(3) 表層構造の視点ハイアラキー

一般的に言って、話し手は、主語寄りの視点を取ることが一番容易である。目的語寄りの視点をとることは、主語寄りの視点を取るのより困難である。受身文の旧主語 (対応する能動文の主語) 寄りの視点を取るのは、最も困難である。

E (主語) $> E$ (目的語) $> E$ (受身文の旧主語) ⁽¹⁾ (同, p. 169)

(4) 発話当事者の視点ハイアラキー

話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとることが

できない。

$1 = E$ (一人称) $> E$ (二・三人称) (同, p. 146)

(5) 談話主題の視点ハイアラキー

談話に既に登場している人物に視点を近づける方が、談話に新しく登場する人物に視点を近づけるより容易である。

E (談話主題) $\geq E$ (新登場人物) (同, pp. 148-149)

視点関係についての一般的規則を仮定すると同時に、(3)~(5)の視点ハイアラキーに違反した場合のペナルティーを設けている。

(6) 談話法規則違反のペナルティー

談話法規則に意図的に違反した時には、特殊な文(多くの場合、不適格文)が生じるが、非意図的に違反した場合には、そのようなペナルティーがない。(同, p. 171)

この原則によって(7)の不適格性と(8)の適格性をうまく説明することができる。

(7) a. ? Hanako was scolded by me.

b. ? 花子が私に叱られた。

(8) a. Hanako told me the truth.

b. 花子が私に本当のことを話した。

(7)の文において(3)が要求する視点ハイアラキーは E (花子) $> E$ (私)であり、(4)が要求する視点ハイアラキーは E (私) $> E$ (花子)である。二つの視点ハイアラキーの間に矛盾が生じる。これは意図的な違反である。敢えて「花子」を主語に立てるといふ話し手の意図があるからである。その結果、不自然な文ができる。(8)においても二つの視点ハイアラキーの間に矛盾が生じている。しかし(8)が不適格文にならないのはこれが非意図的な違反であるからである。「話す」という動詞は主語に動作主を要求し、与格目的語にその相手を要求する。(8)はたまたま動作主が花子で、その相手が発話者であったというだけで、意図的な操作はない。

ところが、日本語には視点に関して特殊な動詞がある。

(9) a. Hanako sent me a package.

b. *花子が私に小包を送った。

c. 花子が私に小包を送ってくれた。

(9b)の視点関係は(8b)と全く同じであるにもかかわらず、(9b)は不適格文である。英語の場合((9a))は全く問題なく適格文になる。この文の適格性は(8)と同じ理由で説明できる。日本語の場合、(9c)は適格文である。(9c)が適格であるのは、目的語寄りの視点を要求する動詞、「クレル」が補助動詞として使われているため、発話当事者の視点ハイアラキーとの間の矛盾が解消されているからである。日本語には「送ル」のように視点が目的語寄りの場合にそれを明示しなければならない動詞がいくつか存在する。

3. 受動文の形態的特徴

典型的な他動詞文は主語と目的語を有し、主語位置の名詞句は動作主を、目的語位置の名詞句は対象を表わす。能動文は動作主を主語に据え、動作主が対象に対してどんな働きかけをしたかを述べる文である。一方、受動文は対応する能動文の目的語位置の名詞句（対象を表わす⁽²⁾）を主語位置に据え、その対象について描写する文だと考えられる。柴谷（1982）はこのような受動文と能動文との対応関係を中心に、受動文の特徴として以下の3点を挙げている。

- (10) A. 意味的に対応する能動文では目的語として起こる、対象を表す名詞句が文法的な主語として起こる。
 B. 動詞に受動態を示す形態的特徴が現れている。
 C. 動作主は表現されなくても良いが、表される場合には動作主を示す要素（格変化、助詞、前置詞等）を伴う。 (柴谷（1982）, p. 261)

これら三つの特徴を基に、本稿が調査対象とする日本語、英語それぞれの受動文を形態的に定義することにする。

3. 1. 日本語

日本語の受動文は統語構造から直接受動と間接受動とに分けるのが一般的である。(11)が直接受動の例、(12)が間接受動の例である。

- (11) a. 太郎が先生にほめられた。
 b. この建物は百年前に建てられた。
 (12) a. 太郎は花子にレポートを読まれた。
 b. 太郎は両親に早く死なれた。

(11)はそれぞれ意味的に対応する能動文が存在する ((11)')。

- (11)' a. 先生が太郎をほめた。
 b. (誰かが) この建物を百年前に建てた。

しかし、(12)には直接対応する能動文はない。意味的に能動文と対応するのは(12)の補文であって、母文全体が能動文に対応するのではない。そして、その補文は他動詞文 ((12 a)) の場合も自動詞文 ((12 b)) の場合もある。このことから間接受動文は(10)に挙げたAの特徴をもっていないということがわかる。そこで、本稿では直接受動文のみを考察の対象とし、直接受動文は(13)に示す形態的特徴をもっているものとする。

(13) 日本語直接受動文の形態的特徴

NP1 ガ (NP2 ニ/ニヨッテ) V-areru/rareru⁽³⁾

3. 2. 英語

以下に示す形態的特徴を有するものを英語の受動文と考えることにする。

(14) 英語受動文の形態的特徴

NP1 be/get V-en (by NP2)⁽⁴⁾

英語には(14)の形態を有している表現が形容詞的に (15), あるいは慣用的に (16) 使われる場合がある。これらは通常「by」句を伴わないし, また意味的に対応する能動表現が認められないので, 考察の範囲には含めない。つまり「by」句が共起できるか否か, 対応する能動文が存在するか否かを受動文認定の基準とすることにする。従って, (17)のように「by」句が存在し, それを能動文 (17') に変換できる場合は受動文とみなす (下線筆者)。

- (15) a. When it appears I think you'll be satisfied. (The Widening Gyre, p. 16)
 b. . . . if you're worried about security. (同, p. 18)
- (16) . . . they were supposed to be tough. (同, p. 30)
- (17) He's excited by his success. (同, p. 107)
- (17') His success excited him.

また, 英語にも日本語の間接受動文に類似した表現が存在する (18) が, 日本語の場合と同様, この種の表現は考察の対象から除く。

- (18) a. I had/get my mother die last year.
 b. I had/get my car stolen (by the street gang). (柴谷 (1982), p. 270)

4. 視点と受動文

能動文は主語寄りの視点, 目的語寄りの視点, 中立の視点のいずれの視点をもとり得るが, 受動文は通常主語寄りの視点, つまり対応する能動文の目的語寄りの視点をとる。別の見方をすれば, 能動文の目的語の名詞句に視点を移動させるために作られたのが受動文ということになる。しかし表層構造の視点ハイアラキーが示すように, 主語の名詞句に視点をおくことが最も容易であるとすれば, 主語寄りの視点の能動文とそれに対応する受動文とは全く異なった視点からの文であるということになる。

ところで, 受動文は主語位置の名詞句の種類によって二つに分類することができる。主語位置の名詞句が有生名詞句であるものは「有情の受身」, 無生名詞句であるものは「非情の受身」と呼ばれている。これら2種類の受動文はさらに, 「ニ/ニヨッテ」句 (英語では「by」句, 以下, 補語と呼ぶ) の名詞句の種類によって四つのタイプに分けられる (19)。

(19) 受動文のタイプ

	主語の名詞句	補語の名詞句	受動の種類
タイプI	有生	有生	有情
タイプII	有生	無生	有情
タイプIII	無生	有生	非情
タイプIV	無生	無生	非情

奥津(1992)は久野が定式化した視点のハイアラーキーの他に、有生名詞と無生名詞⁽⁵⁾という「序列」を仮設している。これを久野流に書き表わすと、E(有生名詞句) > E(無生名詞句)となる。このハイアラーキーを「有生名詞句の視点ハイアラーキー」と呼ぶことにする。そして、ここで視点という観点からタイプI～IVの文を見ると、タイプIは動作主ではなく非動作主となる人物に視点をおいた文である。タイプIIは非動作主の有生名詞句に視点をおいた文である。タイプIIIは動作主ではなく、非動作主の無生名詞句が主語に現れている。表層構造の視点ハイアラーキーと有生名詞句の視点ハイアラーキーとの間に矛盾が生じる文であるが、適格文である。それは動作主を表わす必要がない、あるいは動作主には興味がないから、無生名詞句を主語に据えているからである。従って、視点に関して中立的だと考えられる。タイプIVはいずれの名詞句も無生名詞句であるので、視点に関して中立的である。どちらの名詞句が主語に選ばれるかは談話主題と関係があるのではないかと思われる。

さて、前述した『雪国』とその翻訳による調査(データ総数107例)では、受動文と能動文が全く異なる視点関係を示す文であるにもかかわらず、日本語で受動文が使われ英語で能動文が使われている(以下JP-EAと呼ぶ)ものが14例あった(ただし、ここで扱った受動文はタイプIのみである)。そしてこれら日本語受動文の14例中12例が、談話主題の視点ハイアラーキー、あるいは発話当事者の視点ハイアラーキーから見て主語寄りの視点を示していた。この観察から3種の視点ハイアラーキーのかかり方が日・英語間で異なるのではないかと考えた。日本語では発話当事者からの視点⁽⁶⁾が予め設定されており、それに合うように表層構造の視点ハイアラーキーが働く、一方、英語では表層構造の視点ハイアラーキーより発話当事者の視点ハイアラーキーのほうが重要な働きをしているのではないかということである。以上のことを踏まえると、4タイプの受動文の調査をするにあたり、以下のような仮説が立てられる。

【仮説1】

タイプIは有生名詞句の視点ハイアラーキーから見ると二つの名詞句のどちらにも視点をおくことが可能である。二つの名詞句の間に視点のハイアラーキーはないということである。しかし日本語では発話当事者の視点ハイアラーキーと表層構造の視点ハイアラーキーが矛盾しないように文が生成されるとすれば、タイプIにおいてEA-JPの例がいくつか存在するということが予測される。

【仮説2】

有生名詞句の視点ハイアラーキーが日本語にも英語にも適用される一般的な規則であれば、タイプIIはEP-JPの例が数多く見られるということが予測される。

【仮説3】

タイプIIIは非動作主の無生名詞句について中立的に述べる文である。日本語、英語いずれの言語においても見られる現象であるから、EP-JPの例数が多いと予測される。

5. 調 査

5. 1. 方 法

今回は英語で書かれた小説とその日本語訳を比較するという方法をとる。前回の調査の観察に基づく仮説を調査するために有効であると考えたからである。テキストには Robert B. Parker 著, *The Widening Gyre* とその日本語訳『拡がる環』(菊池光訳)を使用する。テキスト選定理由は、人物描写も場面描写も含まれていること、推理小説であるのであまり文学的表現が見られないことである。

調査の対象となるのは、意識されているものを排除するために日本語、英語共に同じ意味を表わす述語が使われており、かつ構文的対応関係があるものに限る。これは目的が受動文と能動文のどちらが使用されているかを調査することにあるからである。日本語では主語、目的語等が省略されるが、それらの要素は補って考える。この条件を満たすものの中でデータとなるのは英語で(14)の形態をもつ文とその日本語訳、及び日本語で(13)の形態をもつ文とその英語の原文である。

5. 2. 結 果

データとなる文例は95(平叙文90, 疑問文5)である。対応関係を文のタイプ別に示したのが表1である(数字は例の数を示す, ()内の数字は合計である)。日本語、英語共に受動文が用いられている(EP-JP)例が30, 英語の受動文が日本語で能動文になっている(EP-JA)例が52, 英語の能動文が日本語では受動文で訳されている(EA-JP)例が13である。この結果を見ると、表層構造の視点ハイアラーキーに関して日・英語間に同一の視点関係が見られる(EP-JP)のは全体の約32%にすぎないということになる。この結果は日本語と英語では視点ハイアラーキーのかかり方に大きな違いがあるということを示しているのであろうか。以下、タイプ別に検討していく。

5. 2. 1. タイプ I (有情)

表1が示すように EP-JP が最も多い。全体に占める割合は約57%である。次に示す1例を除き、補語(動作主)は表現されていない(下線筆者)。

(20) a. . . . , the street where Crispus Attucks had been shot. (Gyre, p. 153)

表1

関係 タイプ	EP-JP	EP-JA	EA-JP
タイプ I (28)	16	8	4
タイプ II (1)	0	0	1
タイプ III (65)	13	44	8
タイプ IV (1)	1	0	0

b. . . . , その前はクリスパス・アタックスがイギリス兵に射殺された通りである。

(『環』, p. 193)

この場合でも英語の原文には動作主は表現されていない。一般的に言って省略された動作主は不特定多数の人 (21) か, 特定できない人物 (22) である。このような人物に視点をおくことは困難であるので, 非動作主の側からの表現となる。発話当事者の視点ハイアラキー, 談話主題の視点ハイアラキーも主語寄りの視点である。まさに典型的な受動文の使われ方である。

(21) a. He can get elected in his district, but he can't win a statewide election here.

(Gyre, p. 179)

b. 下院の選挙区では選出されるが, この州全体の選挙には勝てない。

(『環』, p. 224)

(22) a. I'm being blackmailed.

(Gyre, p. 35)

b. わたしは脅迫されているのだ。

(『環』, p. 49)

また, これらの例が生起している環境を調べたところ, 母文が5, 補文が3, 関係節, 疑似関係節, 条件節がそれぞれ2, 同格節が1で, 様々な環境で生起していることがわかる。

EP-JA の8例も英語では動作主が表現されていない。日本語で自動詞が使われている例が3例 (23) ある。

(23) a. Were you raised in a Christian faith?

(Gyre, p. 7)

b. キリスト教徒として育ったのかね?

(『環』, p. 14)

残りの5例について, 3種類の視点ハイアラキーの関係を知るために, 発話当事者の視点ハイアラキー, あるいは談話主題の視点ハイアラキーが要求する視点が主語寄りであるか, 非主語寄りであるかを調べた。表2がその結果である(数字は例の数を示す)。日本語の例のほとんどが主語寄りの視点を示している。英語, 日本語共に主語寄りの視点的例は(24)で, 日本語では補助動詞を用いて主語寄りの視点を表わしている。

(24) a. At all the parties we could get invited to, and . . .

(Gyre, p. 134)

b. 招待してもらえるパーティーのすべてで。

(『環』, p. 169)

英語では非主語寄りの視点的例が(25), 中立の視点⁽⁷⁾の例が(26)である。日本語ではいずれも主

表2 (EP-JA)

日本語 \ 英語	主語寄り	非主語寄り	中立
主語寄り	1	2	1
非主語寄り	1	0	0
中立	0	0	0

語寄りの視点である。

- (25) a. “Well, I guess you’re hired then,” Alexander said. (Gyre, p.9)
b. 「では、きみを雇うことにしよう」アリグザンダーが言った。 (『環』, p. 17)
- (26) a. “You have the right to remain silent,” I said. “You have the right to an attorney. If you cannot afford an attorney, one will be assigned you.” (Gyre, p. 114)
b. 「きみは黙っている権利がある。弁護士を呼ぶ権利がある。弁護士を雇う金がなかったら、一人つけてもらえる」 (『環』, pp. 144-145)

(25 b) において省略されている主語は、発話者の「私」、(26 b) においては聞き手の「あなた」である。

発話当事者の視点ハイアラキーから見て日本語では非主語寄りの視点の例は(27)である。

- (27) a. Obviously he’s the one to benefit if I do as I’m asked. (Gyre, p. 35)
b. 私が相手のいうとおりにしたら益を得るのが彼であることは明らかだ。 (『環』, p. 49)

「～の言うとおりにする」は慣用表現と見なせないだろうか。

また、EP-JA の日本語文に使われた文型とその数は、他動詞文、自動詞文がそれぞれ 3、「テモラウ」文が 2 である。

EA-JP の 4 例はすべて談話主題の視点ハイアラキーが関係している。

- (28) a. They told me downstairs that you’re lucky, it missed the bone. Eddie DiBenardi’s belt is missing, and one about the right size was wrapped around your leg when they brought you in. (Gyre, p. 168)
b. お前さんは運がよかった、弾が骨から外れている、と下で言っていた。エディ・ディベナーディのベルトがなくなっていて、ここへ運び込まれた時、だいたい同じサイズのベルトがお前さんの脚に巻つけてあった。 (『環』, p. 211)
- (29) a. I know you’re mad, and I know you feel compromised that they pushed you and Melanie around. (Gyre, p. 27)
b. きみが怒っているのは当然だし、きみとメラニイが二人にこづき回されて自尊心を傷つけられたこともわかっている。 (『環』, p. 40)

談話主題の視点ハイアラキーが禁止しているのは E (新登場人物) > E (談話主題) だけである。従って、(28 a), (29 a) は能動文が使用されていても中立叙述と解釈すれば表層構造の視点ハイアラキーとの間に何ら矛盾は生じない。しかし日本語では談話主題の視点からの描写になっている。

5. 2. 2. タイプ II (有情)

タイプ II は 1 例だけである。

- (30) a. The fact that a congressman’s wife’s a boozier isn’t news unless it involves her

in something that is news, you know? (Gyre, p. 49)

- b. 下院議員の女房が酒飲みであるということは、ニュースになるようなことに巻き込まれないかぎり、ニュースにはならない、わかるか? (『環』, p. 66)

(30 b) は、対応する能動文「そのことがニュースになるようなことに彼女を巻き込む」よりはるかに日本語らしい表現である。

5. 2. 3. タイプIII (非情)

JP—EP の例はすべて動作主は表現されていない。そして13例中10例が(31), (32)のような、物の属性や状態を表わす文である。このような文で必要なのは動作の結果であって、動作主ではない。(33)は動作を表わす文であるが、重要なのは動作主が誰かではなく、何が起こったかである。

- (31) a. Matter is neither created nor destroyed. (Gyre, p. 70)

b. 物質は創造されることも破壊されることもない。 (『環』, p. 91)

- (32) a. . . . , where glassware and china and things were stored. (Gyre, p. 24)

b. ガラスの器、陶器などが保管されている。 (『環』, p. 35)

- (33) a. . . . the Declaration of Independence was read from its balcony and, . . .

(Gyre, p. 153)

b. ～バルコニーで独立宣言が読み上げられた～ (『環』, p. 193)

EP—JA も、英語ではすべて動作主は表現されていない。タイプIIIで最も例数が多いが、よく見てみると、英語文の主語の名詞句が日本語文で目的語になっている例、つまり日本語において英語に対応する能動文が使用されている例は7例だけである。そして7例中3例が(34 b) のように目的語が主題化 (topicalization) されている。4例は(35)のような状態表現である。

- (34) a. The picture of Roosevelt must have been taken before the war.

(Gyre, p. 149)

b. あのローズヴェルトの写真は戦前に撮ったものに違いない。 (『環』, p. 188)

- (35) a. . . . and his white mustache was trimmed close. (Gyre, p. 64)

b. ～、白い口ひげを短く刈り込んでいる。 (『環』, p. 84)

さらに EP—JA の日本語文の文型を見ていくと、日本語で自動詞が使われている例が8例(36) がある。残りの29例は「テイル」文 (37), 「テアル」文 (38), 名詞・形容詞文 (39) である。英語、日本語共に主語の名詞句は非動作主である。英語と日本語では態の異なる文が使われているが、非動作主について述べるという点では同じ効果を生み出している。

- (36) a. . . . and the guilt of sleeping during the day was dissipated. (Gyre, p. 45)

b. うたた寝をした罪の意識が消え去った。 (『環』, p. 61)

- (37) a. An I. V. unit was plugged into the back of my left hand. (Gyre, p. 167)

- b. 点滴の管が左手の甲につながっている。 (『環』, p. 210)
(38) a. It was heavily bandaged. (Gyre, p. 169)
b. 分厚く包帯が巻いてある。 (『環』, p. 212)
(39) a. My cordovan loafers were shined, . . . (Gyre, p. 106)
b. コードヴァンのローファーはピカピカ, ~ (『環』, p. 134)

EA—JP では 8 例中 5 例の英語文で自動詞が使われている。対応する日本語受動文には動作主は表現されていない。EP—JA の場合と同様に、動作主ではなく非動作主に焦点を当てた文である。

- (40) a. “Well, what do you think is going on?” (Gyre, p. 143)
b. 「何が行われている, と考えてるの?」 (『環』, p. 180)

態が完全に逆転しているのは次の 1 例である。

- (41) a. Nudity and sex are big business. Any small grocery in the land will sell magazines that twenty years ago would have landed the seller in jail.
(Gyre, p. 12)

- b. ヌードとセックスは一大産業です。二十年前なら売り手が刑務所に入るような雑誌が, 今はどこの小さなマーケットでも売られている。 (『環』, p. 21)

日本語の (41 b) では前文で設定された主題が引き継がれ、受動文が使われている。

他に、英語で総称的な一般的な人を指す「you」を主語に立てたものが 2 例ある。この主語は英語の統語規則上必要なもので、特別な意味はない。主語、目的語の省略が自由に起こる日本語ではこのような意味のない主語は登場しない。

- (42) a. The other wore an open-necked man-tailored pink shirt with a buttondown collar. Over it she wore a cable-stitched green cardigan sweater. You usually don't see a cardigan sweater except at golf matches and rescue missions.
(Gyre, pp. 147-148)

- b. もう一人は, ボタンダウン・カラーの男物のピンクのオープン・ネックシャツを着ている。その上に縞形編みのカーディガンを着ていた。通常, ゴルフ・マッチか無料給食所でないとカーディガンは見られない。 (『環』, p. 186)

- (43) a. Proof is something you decide in court, Congressperson. (Gyre, p. 150)

- b. 事実 (プルーフ) というのは, 法廷で決められるものだ, 議会人さん。
(『環』, p. 188)

いずれも日本語では非動作主についての表現になっている。

5. 2. 4. タイプIV (非情)

EP—JP は 1 例である。

- (44) a. He really is a born-again fundamentalist Christian. And that limits him. His

options are so proscribed by his convictions that he can't legislate very well.

(Gyre, p. 50)

- b. 彼は正真正銘の根本主義的クリスチャンなんだ。そのために、議員としての限界が生じている。自分の信念によって選択の幅が限定されるために、ろくに立法活動ができない。
(『環』, p. 67)

6. 考 察

能動文と受動文との統語的關係は、能動文では目的語位置に現れる、非動作主を表わす名詞句が受動文では主語位置に現れるということである。この対応關係は他動詞と自動詞との間にも見られる。他動詞の目的語が自動詞の主語として現れるのである。この点で受動文と自動詞文は統語的類似点をもっている。そして柴谷 (1982) には、日本語においても英語においても非情の受身が自然に使われるのは、他動詞に対応する自動詞がない場合であって、自動詞がある場合に受動文が使われると不自然になるということが報告されている。この点を考慮に入れてタイプ III・EP—JA のうち、日本語で自動詞が使われているものをもう一度検討する。

(45)=(36) a. . . . and the guilt of sleeping during the day was dissipated.

b. うたた寝をした罪の意識が消え去った。

(45 b) を受動文にすると(46)のようになる。

(46) うたた寝をした罪の意識が消され去った／消し去られた／消された。

自動詞文の方がはるかに自然である。このように考えると、受動文と自動詞文は非動作主について述べるという点で同じ機能をもっていると考えることができる。日・英の關係が全く逆にあるのがタイプ III・EA—JP の(40)である。(40)では英語では自動詞文が使われ、日本語では受動文が使われているが、非動作主について述べるという点で同じ機能をもっていると言える。

タイプ III・EP—JA の(37), (38), (39)も同じように考えることができる。これらの英語文は状態受身 (stative passive) と言われるものである。非動作主を主語に据え、動作の結果の状態について述べる文である。日本語では「テイル」文、「テアル」文が英語の状態受身と同じ機能をもっているのである。

ではタイプ I・EP—JA の日本語自動詞文はどうであろうか。

(47)=(23) a. Were you raised in a Christian faith?

b. キリスト教徒として育ったのかね?

日本語で自動詞文の代わりに受動文を用いると、水谷 (1994) が指摘するように表現されていない動作主の意図性を感じるようになる。

(48) キリスト教徒として育てられたのかね?

表3 (%)

タイプ \ 関係	EP-JP	EP-JA	EA-JP
タイプ I (28)	67.9	17.9	14.3
タイプ II (1)	0.0	0.0	100.0
タイプ III (65)	84.6	10.8	4.6
タイプ IV (1)	100.0	0.0	0.0

英語では対応する自動詞が存在しないために受動文が使われたと考えれば、動作主の意図性を感じさせない日本語自動詞文と、補語のない英語受動文は機能において同じであると考えてもいいたろう。

非動作主について述べるという観点から見ると、タイプIII・EP-JAの目的語が主題化された文も確かに同じ機能をもっていると言える。

(49)=(34) a. The picture of Roosevelt must have been taken before the war.

b. あのローズヴェルトの写真は戦前に撮ったものに違いない。

(49)のように動作主が省略されている場合には受動文と同じ機能をもっているように見えるが、主題化において動作主の省略は義務的に起きるとは限らない。そして動作主の生起に関して主題化文と受動文は違ったふるまいを見せる。

(50) あのローズヴェルトの写真は私が戦前に撮ったものだ。

(50)は適格文であるが、受動文は不適格文である。

(51) *あのローズヴェルトの写真は私に／によって戦前に撮られたものだ。

従って、主題化と受動化はその機能が異なると考える。

以上の観察から、タイプIの日本語自動詞文、タイプIIIの日本語自動詞文、「テイル」文、「テアル」文、名詞・形容詞文を受動文とみなして、日本語、英語の能動と受動の対応関係を見直すことにする。それが表3である（()内の数字は例の数を示す。）表3に基づいて仮説について検討する。タイプIIIのEP-JPが全体の84.6%を占めることから、非動作主を描写する時には日本語、英語共に受動的表現が使われると考えられる。ただし、日本語と英語では表現方法に違いがある。

仮説2はデータの数が少ないので、結論を出すことはできない。しかし、タイプIIの(30a)をそのまま日本語に翻訳するといかにも翻訳調の文ができることを考慮に入れると、少なくとも日本語には有生名詞句の視点ハイアラーキーが適応されるのではないかと思われる。

次に仮説1について考える。タイプによって例文の数に差があるので、断定的なことは言えないが、EA-JPの出現率がタイプIIIよりタイプIの方が高いこと、タイプIのEA-JPの4例すべてが談話主題の視点ハイアラーキーが主語寄りであること、そして『雪国』によ

る調査結果を合わせて見ると、日本語のタイプ I の受動文では表層構造の視点ハイアラキーが発話当事者の視点ハイアラキー、談話主題の視点ハイアラキーと連動して働くと考えられる。タイプ I・EP-JA の 5 例のうち 4 例が日本語では主語寄りの視点であることもその証拠になるであろう。なぜなら、日本語で受動文が用いられていないのは日本語には補助動詞によって視点を明示する方法がある、さらに受動文を用いると表層構造の視点ハイアラキーと発話当事者の視点ハイアラキー、談話主題の視点ハイアラキーとの間に矛盾が生じるからである。また、仮説 2 を合わせて考えると、表層構造の視点ハイアラキーは有生名詞句の視点ハイアラキーとも連動して働くようである。一方、タイプ I・EP-JA の英語文 5 例中 3 例が非主語寄りか中立の視点であることを見ると、英語では表層構造の視点ハイアラキーはあまり重要ではないようである。金水 (1992) が指摘するように、英語の受動文は「動作主は言いたくない、言いたくても言えないからとか、対象の属性を叙述するため」(p. 18) に作られると考えられる。

では、なぜ日本語と英語では視点のハイアラキーの働き方が違うのだろうか。日本語では主語、目的語の省略が比較的自由に行われる。これは換言すれば、主語、目的語のいずれの位置にも音形のない要素が現われるということである。英語の場合には主語、目的語のいずれの位置にも音形のある要素が必要である。Huang (1984) はこの現象を主題の省略 (zero-topic) を許すか否かというパラメーターを用いて説明している。Tsao (1977) に従い、主題の省略を許す言語を「談話中心型」(discourse-oriented) 言語、許さない言語を「文中心型」(sentence-oriented) 言語と呼ぶことにする。日本語は談話中心型言語であり、英語は文中心型言語である。Huang によれば、日本語で主語、目的語の省略が許されるのは省略された主題 (ゼロ・トピック) によって主語、目的語位置の音形のない要素の指示内容が決定されるからである。一方、文中心型言語の英語ではゼロ・トピックが許されないので、主語、目的語位置に音形のない要素が存在してもその指示内容が決定できない、従って音形のない要素は許されないのである。

実際に日本語と英語を比較してみると、以下のように日本語では確かに主題の名詞句が現われていない。

- (52) a. I called Alexander's office in Washington and told him that I was coming down and why. Then I pulled out my typewriter and wrote up what little I knew about things. It took one page, double-spaced. I folded it up, put it into an envelope, sealed the envelope, and took it over to the Harbor Health Club to leave with Henry Cimoli. (Gyre, pp. 81-82)
- b. ワシントンのアリグザンダーのオフィスに電話をして、行くこととその理由を話した。次に、タイプライターを引っ張り出して、わずかしかないが、今度の事件についてわかっていることを書き並べた。ダブルスペースで一ページですんだ。たたん

で封筒に入れ、封をすると、ヘンリー・シモリに預けるためにハーバー・ヘルス・クラブへ行った。 (『環』, p. 106)

(52b) では一文目から主題が省略されている。省略された主題は「私」と考えるのが普通であろう。「私」はこの談話において一度も登場しないが、「私」が第一文から最終文まで支配していると考えられる。一方、(52a) ではすべての文に主語の「I」が登場する。

日本語で主題の省略はどのような条件の下で行われるのであろうか。これについては久野(1978)に詳細な研究がある。それによると「話者の視点が主題の視点に近づけば近づくほど、主題が省略し易くなる、という傾向」(p. 106)があり、最も近づいた場合が主題が発話者の場合である。(53)で省略された主題は「私」と解釈するのが最も自然であろう。

(53) 図書館で花子に会った。

(54) 花子は今日は来ないと思う。

(55) 花子が合格して嬉しい。

特に(54), (55)のような思考や感情を示す表現では省略された主題は通常、発話者として解釈できない。

次に主題が発話者以外の場合をしてみる(原文のふりがな略)。

(56) 踊子はやはり唇をきつと閉じたまま一方を見つめていた。私が縄梯子に捉まろうとして振り返った時、さよならを言おうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなずいて見せた。 (『伊豆の踊子』, p. 39)

(56)でうなずいたのは踊子である。「私」と「踊子」とを比較すると、「私」寄りの視点をとる方が容易である。しかし、一旦「踊子」が談話の主題に決定されると、複文の主語に「私」が登場してもその影響力は第2文まで及ぶようである。

談話中心型言語である日本語においては、発話当事者寄りの視点⁽⁸⁾、あるいは談話主題寄りの視点を中心に文が作られるのではないかと考えられる。そのため、日本語では視点ハイアラーキー間に矛盾が生じない。日本語受動文は一旦設定された視点と矛盾しないように使用されるのである。ところが、英語では、文には必ず主語が必要である。文ごとに主語を規定していかなければならない。そのために表層構造の視点ハイアラーキーから見ると目的語寄りの視点の文((8a))や無生名詞句を主語にする文((30a))が自然にできる。この統語上の制約のために、英語では表層構造の視点ハイアラーキーが日本語ほど強く働かないのではないかと⁽⁹⁾と考えられる。

7. お わ り に

タイプIIIにおけるEP-JPの割合が高いことから、非動作主の無生名詞句について中立的に述べるタイプIII⁽¹⁰⁾の受動文の使われ方は日本語、英語間に大きな差はないと言えるだろう。しかし、被動作主に視点をおいたタイプI、非動作主の有生名詞句に視点をおいたタイ

プIIの受動文の使われ方には日本語、英語間に差が見られる。日本語では表層構造の視点ハイアラキーと談話主題の視点ハイアラキー、あるいは発話当事者の視点ハイアラキーや有生名詞句の視点ハイアラキーとの間の矛盾を回避するために受動文が作られるのに対し、英語では視点ハイアラキーとは関係なく、動作主の明示を避けるために受動文が作られるようである。そしてそれは日本語が「談話中心型」言語であるのに対し、英語は「文中中心型」言語であることによって起こる視点ハイアラキーの働き方の違いによるのではないだろうか。

受動文と受動文が生起する構文との関係については調査できなかった。これは今後の課題としたい。

注

- (1) Surface Structure Empathy Hierarchy は Kuno (1987) では次のように修正されている。
Surface Structure Empathy Hierarchy (revised) : It is easier for the speaker to empathize with the referent of the subject than with the referents of other NPs in the sentence.
E (subject) > E (other NPs) (同, p. 221)
本稿で問題になるのは主語の名詞句と受身文の旧主語の名詞句との関係なので、久野 (1978) を採用しても問題ないと思われる。
- (2) 受動文の主語になり得るのは必ずしも対象だけだとは言えない。重要なのは動作主ではない名詞句が主語になることなので、以後、非動作主と呼ぶことにする。
- (3) 「areru」, 「rareru」は受身を表わす接尾辞で、「areru」は子音動詞, 「rareru」は母音動詞のそれぞれ語幹に接続する。() 内の要素は省略される場合もある。
- (4) V-en は動詞の過去分詞を表わすものとする。() 内の要素は省略される場合もある。
- (5) 奥津 (1992) は有生名詞と無生名詞という序列の他に、人間名詞と動物名詞、内と外といった序列を挙げている。
- (6) 『雪国』による調査ではタイプ I の受動文しか扱っていない。そのため人物に言及している発話当事者の視点ハイアラキーと表層構造の視点ハイアラキーとの関係についての考察にとどめた。
- (7) 談話主題の視点ハイアラキーが示していることは新登場人物より談話主題に視点を近づける方が易しいということと、中立の視点をとることができるということである。従って、(26)は二通りの解釈が可能だが、ここでは中立と解釈しておく。
- (8) これは平叙文にのみ適用される。
- (9) 金水 (1992) は他動性という観点からこの点を指摘している。
- (10) タイプIVについてはデータ数が少ないので結論を出すことはできない。

引用文献

- 川端康成 (1950) 『伊豆の踊子』新潮文庫
 パーカー, ロバート・B 著, 菊池光訳 (1984) 『拡がる環』早川書房 [文中, 『環』と略記]
 Parker, B. Robert (1983) *The Widening Gyre*, Dell Publishing, New York. [文中, *Gyre* と略記]

参 考 文 献

- 大塚容子 (1989) 「視点による日英比較」『日本語教育』67号 日本語教育学会
- 奥津敬一郎 (1992) 「日本語の受身文と視点」『日本語学』11巻9号 明治書院
- 金水 敏 (1992) 「場面と視点—受身文を中心に—」『日本語学』11巻9号 明治書院
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 柴谷方良 (1982) 「ヴォイス 日本語・英語」『講座 日本語学』10巻 明治書院
- 水谷信子 (1994) 『実例で学ぶ誤用分析の方法』アルク
- Huang, C. -T. James (1984) 'On the distribution and reference of empty pronouns' *Linguistic Inquiry*,
Volume 15 Number 4, 531-574.
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Tsao, F. (1977) *A Functional Study of Topic in Chinese : The First Step toward Discourse Analysis*,
Doctoral dissertation, USC, Los Angeles, California.